
神で勇者で莫迦な俺

たこ焼きの神様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神で勇者で莫迦な俺

【NZコード】

N3025Y

【作者名】

たこ焼きの神様

【あらすじ】

～～～（一応）あらすじ～～～

実は神の息子で、現在は神代理という主人公・天野あまのけんと剣斗けんと14歳は、

いろいろ

あって隔離都市四神街の西に存在する雷西学園（中等部）に編入することに。

そして、またまたいろいろあって、自分が勇者であることが告げられる。

この街では毎年あるイベントが行われる。その名も“区間戦争”。
剣斗は一応この区間戦争にて優勝するために、クラスメイトを始め、
学園の仲間たちとともに“朱雀”“青竜”“玄武”に勝る力をつけ
ようと努力するが…。

勇者一行による“非”日常的な物語、ここに開幕！！

プロローグ（元していいのか此処…）（前書き）

どうも、たこ焼きの神様です。

この小説が初投稿です。しかも人生初の自分で書いた小説（笑）
正直上手くないですが、興味のある方は是非、読んでみてください
！！

あ、あと更新遅いのは勘弁！！

プロローグ（はじめていいのか此処…）

「くそつーー！」はもうダメか？」「

「だろうな、もう諦めよう、對馬…。」

「でも…もうすぐアイツがつ！…」

ドンッ！

パンツ、パンツ、パンツ！

乾いた銃声が響き渡つている。

そこに広がるのは、生と死の境目。

血と汗が滴る戦場。そのものだつた。だが、そこにいる兵はみなゲームをしているような楽しそうな表情。

押されているであろう、白の特攻服を着た兵たちは希望に満ちた表情をしている。

まるで、誰かが来るのを待つているよ！」。

「おい、沙鬼。空を見ろ、空を…」

見上げた空には、巨大な戦艦。この状況でみんなのはもはや絶望的な事態だ。

だが…。彼女は微笑つている。

「フツ、これは、潰し甲斐があるな…。」

「おい、でもあれはさすがにやばくないか？アイツがいつ来るかわからんねえのに。」

「だが龍斗、アイツはいつも、こんだけ待たせておいて、登場だけは空氣を読んでいる。やつだろ？」「

「それもそうだな。」

この3人だけじゃない。ここにいる全員が誰かを待つていてる。

そう、ゲームだ。ゲームでいう、まるで勇者を待つ囚われた姫のようだ…。

その時だ、この入り組んだビルの谷間に眩い光が走った。

それは、希望の光…。

「やつとか…。勇者！」一 行。」

「またせたな、みんな。ここからが本番だぜー。」

勇者と呼ばれた少年が、そのままいつと、その場に吹く風は向きを変えた…。

形勢逆転…。まさにぴったりの言葉だ。

ほんの一瞬で、押していたはずの青い甲冑を着込んだ兵たちが引いていく。

本当にゲームのようだ。事が淡々と進むだけ。だつたのだが…。

「おい、勇者氣取りのアホ剣斗。」

「は、はい？ な、なんでしょ、うか、沙鬼さ、ん？」

「かーなり息苦しいんだが…、もういいいか？」

「いやいやそこはもう少し粘るつよ。」

「やつは言つてもな。ほら、対馬なんてもうストレスが限界みたいだぞ？」

名は沙鬼といつのであらう少女が指差したぼつぼつ、今にも感情を爆発させて暴れだしそうなやつが、必死になつて自らの理性と格闘している。

「いや、アイツに関しては期待はしてなかつたぞ。むしろよく粘つたほうだと思うよアイツにしちゃ。」

「ま、それもそうだな。で、そつちまどつだ龍斗。」

「どうしたんだ、沙鬼。」

と、まじめな顔で切り返すのは、龍斗と呼ばれた少年だ。

「いやいや、どうしたじやなくて。ていうかもうここんじやないの？ そのキャラ。少し殴りたくなつてきた…。」

「それもそうだな、あーあ、疲れた。こりや明日かなり精神的にくるな。」

「おーおー、お前らなあ。もう少しまじめにやねりつよ。これ、一年で一番重要なイベントなんでしょう？ なあ、龍斗？」

「それはそうだが、剣斗、おまえがいる時点でこつちは勝利確定。もうチート状態なんだぞ。スター取つて暴れまわつてる状態なんだ

ぞ?
」

勇者、剣斗は自分の後ろにいる少女を指差して言った。

「えー。あたしがやるの？お兄ちゃん。

「ああそうだ。あと、そのお兄ちゃんってのやめひいてるだ

う。恥ずかしいから。

「そんな」と言われても、癖になつてゐるんだから仕方ないぢやん。」
「あー、まあそこは二二三三がうか、『カーノ』もつしよ。

「まあいいか。そのかわり、こんど私にアイスおごってよ。

「ああ、覚えてたらな。」

と轉く語を添めてから、眞極口轉々ごく叫んで、「ニシモ、千鶴。眞龍の親因が初の御子殿ひき

「はーい。ていうか、死ないんだから殺るつておかしいんじゃな

۱۱۷

「なーはー。」

シユン

二二

卷之三

「お疲れ千穂。

「疲れてない！」

新編 本居宣長全集

ホグリトから携帯を取り出した。語力は連続で、勇者はいつの間にか寝込んでいた。

ブルルルル。 ブルルルル。

「あ、もしもし、俺だけど。そつちはどうなってる?」
「ああ、剣斗か。大丈夫。もう少しで頬を取れる。」

L

だが、電波が悪いのか

「何？もう少しで何だつて？」

「頭が取れる。」

「ああ？ カツラが取れる？ おまえカツラだったのか……。大変だな……。

「ちげーよ！ 頭だ。“か・し・ら”。」

「ああ、頭ね。」

「で、そういうそつちは？」

「ああ、もう親玉から冠球もぎとつて終了！。」

「はあ！？ 目玉から眼球くりとつて終了！？」

「馬鹿が、“お・や・だ・ま”から“か・ん・せゅ・う”もぎとつて終了。」

もはや漫才だ……。緊張感の欠片もない。

「そうか、そつちの部隊に親玉がいたのか……。」

「ああ。だから、もう冠球は奪ったんだ。お前らはいいんじゃないのか？」

「いや、それじゃあつまらんだろう……。てなわけであと3秒で仕掛けは完了だ。」

「へいへい。わいつあと終わらせよう……。と、ああそりだつた。爆破するなら先に言つてくれよ？ 耳栓しないと鼓膜がやばいから……」

「了解。」

ガチャ……。

こんなんでいいのだろうか……。

ここは戦場だ……。

戦場のはずだ……。

なのにこの軍の兵は全然涼しい顔をしている。それも、そろいもそろつて皆だ。

兵隊全員が、この戦争を楽しんでいる。しかし、これは戦争といつても……。死がない戦争だ……。

武器は本物の銃。痛みも感じる。
だが死はない。死ぬことはない。
たとえ死に程痛い思いをしようが
関係ない。

しないのだから。

「おーみんなー！アイツの爆発が来るぞ、耳ふさげーー。」

わごと、戦場が沸き上かる

それほど大きいのだから、その爆音は…

下

卷之三

と 炸裂した光の後に続いて 爆音が響き渡る。.
いくら死なないって言つてもやり過ぎではなかろうか。.
三、勇者 こりゃ殺すぞう判子は、なにこな、用ひ

「みんな、青竜は打ち取つた！！これで残るは朱雀と玄武のみ！！
こつからが本番だあああ！！！」

才才

ふと歴者は思ひ。

なんでこのようなめんどくさいことになつたのか。
とか、俺ってなんで勇者な訳？

波乱の血口紹介（前書き）

こつからぬ編集ミスかなり多めだと思つんですが、目をつぶるか指摘してくださるとありがたいです！！

波乱の自己紹介

「おまえは今日から、勇者だ。」

そうだ、この瞬間、俺の世界は180°。変わったんだ。

俺は今、教室の前にいる。でも、まだこの教室には入ったことがない。この学校、雷西学園は、ここ^レ隔離都市四神街の西に存在する。まあ、これも聞いた話なのだが、この^市都市には、雷西のほかに、南、北、東、というように、それぞれ対立した学園があり、それぞれが、毎年秋に行われる区間戦争で勝つために、特別なメンバーを集めて育成するらしい。

んで、ここがその一つ、西の育成所。というわけだ。俺はこの冬にここへ転校することになった。編入試験も普通レベル、実戦だって普通レベル。ついでに、顔も普通レベル。

これといって目立つところのない俺が、この学校で唯一、特別を名乗っていいのは……

そう、自分が”勇者”だということだけだ。

(ガラッ)

教室のドアが開けられた。

「天野、入つていいぞ。」

俺は教室に足を踏み入れた。

そして……。

一步下がつて、二歩下がつて……。

「どうした、天野？」

つと、ここはしつかり第一印象をよくしなければ。
もう一度教室に入る。

今度は、さつきほどではなかつた。

だが、やはりクラス全員の視線はかなりきついものだつた。

「んじや、天野。テキトーに自己紹介な。」

適當つてオイ。教師が言つていいことじやない気がするがあそこ
はスルーだ。

第一印象、第一印象。そつ自分に言い聞かせて、

「天野 剣斗といいます。」

と、ここすでにクラスがざわつき始める。

（うわ…これは絶対違うな）

（てことは、他のクラスに取られたか…）

（あれがそうなわけないわ…）

なにがそうでないのかわからないが……一つ分かるのは、俺の名前
がパツとしないってことくらいだ。

だが、ここからまた、クラスの反応が変わることなど、俺はまだ知
つてるわけがなかつた。

「……えっと、一応…勇者です……」

……少しの沈黙の後

一番前の席にいたやつが声を上げた。

「…マジ、かよ…」

そして他のやつらも

「うおお！」

「やつたぜー！」

「私たちのクラスだー！」

と、口々に喜びの声を上げている。

しかしそれはそう長く続かなかつた。

「おまえら、一旦静かにしろ…。」

先生の声でみんなはまた静かになつた。

「天野、自己紹介続けてくれ。」

なんなんだよこれ…。

なんでみんなは、入ってきた時からは想像もつかないような田で俺
を見る！？

まあ、いいか。

「えつと、学科はメインがエレメントマスター」

みんなはさぞ顔の筋肉が柔らかいんだな……。また表情変えやがった……。

今度は、驚きの表情かな。

だが、そんなことは関係ない。

「サブはまだ決まってません。」

ここから先是、俺自身も言おうか言いまいか迷つた。でも……言わなきゃ落ちつかねえ……。

「得意魔法は、火炎術と……神術です。」

シーン

「……し、神術……！」

はは……

やつぱりそうかい……。

まあこれは予測していたんだが、結構照れるな……。

先生までが驚いてる。

確かにそれも無理はないんだが。

何しろ神術ってのは、その名の通り”神”の力を使うことができるんだから。

「まだ、来たばかりで此処のことよくわからないから、最初は迷惑かけると思いますけど、よろしくお願ひします。」

とまあ、適当に言つてれば、第一印象は“普通”として通るだろうが……。

先生の一言で、その念願は叶わない。

「……えつと。じゃあみんな質問なんかあつたら訊いていいぞ。」

さて、ここで地獄の質問ターム！

つて、ほんとに地獄だよ……。

「じゃあ、えつと……その神術って……具体的にはビリビリ……つて、初っ端からそこかよ……。」

それはラスボスだろーが。まあそこで終わってくれるならある意味ラッキーか……。

「先生、今ここに少し使つてもいいですか？危なくないのにするんで。」

そう、これが一番早い。耳で聞くより目で見ればわかるだろ。

「ああ、いいぞ」

「んじゃ、やつそく……」

クラスのみんなの目が期待の視線を送つてくる。

どうせカッコイイ呪文的なものを期待してんだり……。
ま、そう思つてもないものはないんだけどねー。

「フューリス、出でてきていいぞ……。」

ポンッ！

俺は相棒の名を呼び、手を前に突き出す。

そつ、こんな簡単な動作だ。だが……。

俺の目の前には、人の顔一つ分くらいの小さなドラゴンが現れた。

「……」

だが今回まさかよりもかなり早く、その沈黙は崩れる。

「ド……ドラゴン……？」

わざの一番前の席のやつが、またも声を上げる。

他のやつらも驚愕の顔だ。

「剣斗、遅いよ呼ぶのがーあそこがどれだけつまんないか知つてる
でしょ……！」

少し子供っぽい可愛らしい声で、そのドラゴン、フューリスはわめき散らす。

「仕方ないだろ、手続きなんかもあつたんだから……。少々我慢しろ
つての。」

「剣斗のバカ！」

と、フューリスはそっぽ向いて言つ。

こんな普通な会話なのだが、当然これもみんなの驚きの対象だ……。

「「「しゃべったー!?」」「」

「……今、そのドラゴンしゃべったのかー!?」

「ああ」

「なんで『リーハンガ』がここにいるんだよ…。」

「そりやまあ。呼んだから。」

「どうやった『リーハン』なんか呼べんだよ…。」

「神術で。」

「わへ、めんどくせこから終わりせぬ」と云つて…。

「先生、もうじこですか？」

「ああ。」

「あ、あと『ライツ』出したままにしておこうですが、黙らせてくんで。」

「まあ、邪魔にならないのなら。」

「やつぱ、大人はいいねえ。話が早くて済む。
「ちよつと剣斗、つるむかこつて何だよー。」

「やつこつことだ。」

「ほんと、『リカシー』がな

「サイレント…」

「…………（いんだから）」

「…………（つて、ちよつと。『ライツ』かしてよー。）」

「黙るならいいぞ…」

「…………（わかつたよ、黙ればいいんでしょ黙れば。）」

「ああ、黙ればいい。」

そういうつて俺はサイレントを解いてやる。
しかし

「剣斗ー・どうこい！」

「サイレント…。コリシトウオ」

「…………（またやつたなー？早く解けー）」

「三十分は解けないぞ…。」

と、クラスがざわついてるうちに、俺とフローリスはしょーもない会話をしていく…。

かくして“地獄の自己紹介”は無事幕を閉じた。
じゃないかもしねーが

訓練開始！！（前書き）

数字とか横になつてるのは勘弁！！

訓練開始！！

今は授業後の休み時間。

俺の席には当然の如く行列ができていた。ほかのクラスのやつも交じっている。

まあ、転校初日ってのは大体みんなこうなんだらうが…。
と、ある男が俺に近づいてきた。

「よう。天野だっけ？俺は水上龍斗みなかみりゅうと」のクラスの委員長で、アクリアマスターだ。よろしくな。」

まあ、この類のやつは、いいやつってのが相場でき決まってる。仲よくなつてて損はない。

「ああ。こちらこそよろしく。」

ふと、隣にいるやつの存在に気付いた。

「で…。そっちは？」

俺は、いかにも不真面目ふ�めいな、隣向いてしゃべってるやつのほうを向いて訊いた。

「ああ。對馬、自己紹介よろしく」

「おひ、そうだった。俺の名前は大地對馬だいちとうま」のクラスの問題児だ。おひおい、自分で言つなよ…。

「對馬、そりゃ自分で言つたらおしまいだ…。」

「いいじやんかよ。ホントのことだし…」

「そりゃそうだけ…。」

「そうそう、それより、天野。俺たちのメンバーに入らないか？」

「メンバー？」

嫌な予感がしてたまらない。そう思いつつも、訊いてしまった。

「そりゃ決まつたんだろ、“BTBシユガ”だ

は…？」

「なんだそりや？」

「BTBシユガーってのは、B美少女T追跡B部隊 のことだ！」

ただのストーカーだし……。

「…ま、まあいい。んでそのシユガ一ってのは？」

「ああ、これ？これは俺らのボスが佐藤つてんだ、んで 佐藤＝砂糖＝シユガ一 ってわけ。まあ、佐藤のもじりだ。」

「これは手を出してはいけない類だな…。」

で、こんなことを大きな声で話してもなんの反応もないこのクラスつて…。

と、思つていたら。

「コラアアアアア！！転校生に変な勧誘するなあ！」

と、逆方向から、少女がドロップキックをしながら飛びかかってきた。

「だ、誰ですか！？」

「ああ、済まない。私は闘上沙鬼（じゅじょうさき）だ。今後よろしくたのむよ。」

蹴とばした大地を踏みつけながらの血（け）了解だ。

「ええ…こちらこそ…。」

でも、この子も悪い奴じやあなさそうだ。

ホントにここは個性的なやつばっかだな…。

まあこうして俺の転校初日は終わったわけなんだが（実際終わってなかつたりする）俺の机の周りを取り囲むようにさつきの3人が陣取つている。

「で…何？」

そして3人そろつて

「…頼む！…」

「明日、神術の授業があるんだけど、その…予習が全くで…天野ならよく知つてるから天野に訊こうとなつたわけだ…すまないが、教えてはもらえんか？」

上目づかいにこちらを見上げてくる3人に、俺は耐え切れず…

「あ…はは、いいよ、俺でよければ…」

「じゃあ、天野の家に集合

」

「「おー」」

「お…お~」

と、かくして俺の家に向かつてゐるんだが。

「なあ、俺の家は親いないからいいけど、おまえら大丈夫なの?」

「ああ、俺らも親はいないからOKだぜ」

「そう、ならいいんだけど…」

「いや、ほんとはよくない。」

なんせあの家にはまだ、曲者(くしやく)が一人残つてゐるからだ。と、そんなことを思つてゐるうちに、家に到着。

まあ自分で言つのもなんだが、俺の家は結構広い。

「おいおい…なんだよこれ…」

「デカすぎじやね?」

「凄いわね…」

と、口々に感想を漏ら(ろう)しているが、ほんとにそんなことぐら(ごら)うしか言つ(いつ)いことがないくらいデカいんだよなあ、無駄(むだ)に…。

「ま、みんな、今日はゆづくつしていつてよ」

「ついーっす」

「了解」

「お世話になる」

さ、“アイツ”が帰つてくる前に早く部屋に逃げ込まねえと…。

ガチャ

家のドアを開ける…

「ただいまー(誰もいない。と思つてゐる)」

「「お邪魔しまーす(誰かいる。と思つてゐる)」」

ガチャ

次は、リビングのドアが開く音だ。

しかし、俺たちはまだ玄関だ。

嫌な予感しかしない…

そして、そいつは姿を現した…。

「お兄ちゃんおかえり…?」

そう、俺の妹だ。

なぜこんなにもみんなと引き合させたくなかつたかとこいつ。
こいつは家の中じや、下着だけになるといづれもつまらない癖があるからだ…。

「ち、千穂…。帰つてたのか…？」

「うん…で、そつちは？」

「ああ…こいつらね。俺のクラスメイト…」

「あ…ああ、そうなの…」

「どうも…千穂ちゃん…だっけ？」

「こ、こちら…や…。」

「お、おい天野…。一ついいか…？」

「な、な、何だ？」

「じゃあいくぞ…」

「おう…」

「俺の理性が保つてゐるうちにその娘に服を着せてくれええええ！」

「…！」

「キヤ

「

「あははは…、千尋…、服着ろ。」

「つ…うん

そして千尋は、自分の部屋へと消えていった…。

まあかくして俺の部屋に到達したわけだが、神術つて言つても何を教えればいいのか…。

しかし神術は、初歩レベルなら普通の人にも使えるはずなのだ…。

「なあ、神術を教えるつて、何を教えてほしいんだ？」

訊いてみると、水上が切り返す。

「まあ教えるつて言つておいてなんだが、明日の授業はそこまで難しくないんだ。でも、先生が神術の初歩なら俺ら一般生徒にも使えるからそれで実戦をやるつて言つたんだ」

つぎは大地

「で、お前にそここのレベルまで教えてもらつてたら、授業も楽かと

思つてな

ふう、そういうことか…。

一から原理の説明やら云々を教えないわけないのかと思つていた俺は馬鹿なのか…？

いいや、それは違う

なんせこいつら、泊るぞって言つてるような装備だから。

3人とも大きなショルダーバックを持ってきている。

今思うと学校から直行したのにどうしてこんな大きな荷物を持っているのか不思議なのが、まあ俺としてはさほど問題ないので放つておくことにした。

「ま、そういうことならさ、ここ地下には俺がいつも特訓している訓練所があるんだ、そこなら神術や魔法なんかを使つても平氣だから、そこで練習しよ。」

水上や大地は乗り気だが、闇上は疑問があるような顔をしている。「すまない。ちょっとといいか、天野は最近引っ越しして来たんじゃなかつたか？」

「ああ、そうだけど」

「ではなぜ、ここ地下にある訓練所を“いつも使つて”いると言つたのだ？」

「ああそれね、この家には10年前から住んでるんだけど、この家もさ神術で移動できるんだよ。それでここに家」と引っ越しして來たつてわけ。」

「なるほど。しかし神術とはなんでもできるんだな。」

「まあ、魔力の許す範囲ではね」

そう駄弁つてゐうちに地下室に到着した。

「みんな、ここからは戦闘しながらの説明になるけどいいかな？」

「どうしてだ？ この中は訓練所だろ？ どうして戦闘になるんだ？」

「それは訓練所って言つても神術のだから、中に入ると訓練ロボが大量にいて、サバイバル状態つてわけだ」

水上は不安そうな顔をしたが、大地のほうはやる気MAXのようだ

「へへ、面白かったじゃねーか。何が来ようと俺がぶっ飛ばしてやる。

-

こちら闘上も静かながらもかなり闘氣に満ちて いるようだ。

この二人は実戦好きでことだな。

「じせ、設計上危なくないうになっているけど、怪我だけはしないように。あと、この中でダメージを受けると、そのままの痛みを感じるんだけど、実際は怪我などはないから、混乱しないようにな。

L

「うや、行くぜ。」

卷之三

1

訓練所要時間2時間余り…（前書き）

即行4話目です。

もう少ししたら更新ヤバいほど遅くなる（と思つ）よ～（笑）

訓練所要時間2時間余り…

「ここは、訓練所のA区間。」
「ここはまだ訓練口ボが出てこない場所だから落ち着いて話せるようになつていて。」

「じゃあ、こちら辺で一通り神術の説明でもしとくかな」

しかし、大地がそれを遮つて言つ

「ちょっと待つてくれ、俺はあそこにいるロボットを倒したくてたまんねえんだけど」

「こいつは理屈でどうにかできるやつじゃないな。まあでもここでアイツらを攻撃してくれれば神術を嫌でも教えてもらわなきゃいけなくなるから、好都合っちゃあ好都合だな。」

「いいぜ、ここからでも攻撃は届くはずだから、相手はあれ以上近づけない。思う存分やればいいよ。」

「それじゃあ遠慮なく！」

大地は魔法を発動する体勢をとる。

スウウウウ

。

と大地の体から魔力が溢れる。

「いくぜ、グランドラシュ！」

大地の手から波紋状の衝撃波が放たれる。

刹那。

大地が放った衝撃波が地面に到達した瞬間、普通の地面なら跡形もなく消し飛んでそなぐらいの衝撃が、地面を走った。

ここが対神術用の設計じゃなければ、今頃全壊だろう。

しかし、予想以上の威力だ。これなら神術を（初歩だが）使いこなすのも時間の問題だろう。

爆煙が薄くなつていく。

「へつ、どうだ…」

しかし、大地の期待とは裏腹に、ロボットのほうには全く傷一つ付いてない。

「マジ…かよ。何でだ、今のは俺の中でも結構威力の高い魔法だつたはずだぞ。」

「大地、それは仕方ないことだ。みんなも分かつただろう、コイツらには魔法が効かねえ。倒したけりや、神術を使わなきゃいけない。」

「ここは神術の訓練所だから、普通の魔法でやられてたんじや意味がねえ。」

「でも、最初のほうの敵は、簡単な神術でも粉々になるような敵ばかりだ。」

俺は、掌に、小さな光の玉を作つてみせる。

「こんな風にね」

そして、ゆっくりとロボットがいる方へそれを投げる。

そんな簡単な、そして全く何の苦も無く、ゲームしながらでもできる動作なのに。

それが一体のロボットに当たった瞬間…

ドンッ…！

光の玉は、鈍い音を立てて破裂した。

そして、踏ん張つても吹き飛ばされそうなくらいの風が俺らを襲う。

そう、これはただの爆風だ。簡単な動作が引き起こした、簡単に説明のつく爆風だ。

そして…。目の前のロボットは跡形もなく、消えていた…。

「とまあ、こんなとこだよ。神術の初歩っていうのは」

初步でこれだけの破壊力を持つているのに、上級になるとどうなんだつて思つのが自然なのだろう。しかし、上級に上がるにつれて神術は、普通では考えられないようなことをできるようになるが、殺傷能力はさほど上がりない。というか、神術はもともと自衛のための魔法だから…。

「つて、3人とも氣絶か…。まあ最初は無理ないか…でも。朝までにはこんな屁でもねえくらいにしてやるよ……。」

でも…。じりや 30分くらい起きねえか…。
と思った瞬間…。

ポンッ！

と、小さな音を立てて、もうみんな忘れていたであろうフーリスが現れた。

「おつはよー剣斗！」

「つたく、うるせーな。スリープモードはもつ終わりか？」

「いや、まだなんだけどなんか外で面白そうなことしてるから起きた」

せっかく静かだったのに…

「あつそ。じゃあ、あまり騒ぐなよ」

「了解…！」

こいつは、スリープモードと言つて、まあ簡単に言つと睡眠時間的なのが決まつていて、その時間内は異次元にいなければならない。そこには、フェリスのようなドラゴンもたくさんいるんだが、こいつが友達を作らないせいでのつまらないからという理由で常時連れ歩かなくてはならない始末だ。

「それにしても、すぐに終わつちやいそうだなあ…」

俺は小さく呟いた。

「ん、なんか言つた？」

「いいや、なんでも…」

終わるつていうのも、さつきの大地の攻撃を見ると、魔力、戦闘センス、技量、どれをとってもかなりのものだ。だから、案外早くに神術を習得しちゃうんじゃないかと…。

他の2人はどうか知らないが、なぜかそんな気がするんだ。

と、

「い…痛…」

ん？

「痛えなクソッ！」

大地の声だ、もう目が覚めたらしい。

「よつ、と

「ふうー」

他の2人もそろって起きてくれる。

ふと、大地が俺に気付いて、

「お、天野。おまえさつきのどいつやつたんだ? 漆すぎだろあれ! 俺たち今からあんなの使えるようになるのか? なあ?」

「ノリノリだなおい。

「對馬、少し落ち着かないか」

しかし、ここには鬪上が鎮める。

「なんだよ、堅えな沙鬼は……」

それにして、結構仲がいいんだなこの2人。

つて、そんなことは関係ないが、ここからが大変なのに……分かつてんのか、こいつら……。

それから一時間ほどたつた。

色々苦労したけど……もう最終段階か。

「よし、3人とも。自分が完成させた技を使って、A区間のボス。

“タイタン”を倒したら、一通りのことは終わる。さ、準備はいいか?」

と、いい雰囲気になりかけたところで、フェリスが水を差す。

「ねえ剣斗。こうじうのつて修行中をもっと盛り上げるんじやないの?」

余計なことを……と、思つてるのは俺だけじゃなさそうだな。

「色々と事情があんただよ!」

「ふーん」

つたく、マジで空氣読めないやつだ……ま、この際どうでもいいんだが。

「……氣を取り直して」

俺たちは、結構広いホールのような場所に来ていた。

どこか薄暗く、いかにもラスボスつて雰囲気の出てる場所だ。

ま、設計したのは俺だが……少し臨場感を出しすぎて、禍々しい氣

配が漂つてきてるところがまた妙に薄気味悪い……。

「さ、出てこいタイタン！」

俺はフェリスを召喚した時のように、手を前に突き出して叫んだ。すると何も無い虚空に、光が集まり、強い殺氣とともに黒い影が姿を現した。

徐々に見えてきたソレは、この場の禍々しさをより一層強くさせる漆黒のボディに、そこから溢れんばかりのダークオーラを放つている。

そこでようやく水上が声を上げた。

「……俺たち今からこんなと戦うのかよ……。」

確かに外見だけで感想を聞くと十中八九、恐ろしいってなるだろうが、実際この3人の実力なら、全然倒せるんじゃないかと俺は踏んでいた。

続いて水上の緊張を解くように、闘上が言う

「……こいつは、対馬のドス黒いオーラよりも黒いオーラが出てるな……。」

確かにその通りの考察に俺たちは大地をかばうこと�이できない……。

「ああ沙鬼。だが、茶番はそこら辺にしといたほうがいい。そろそろ戦闘準備が整うぜ、アイツ……。」

大地が言い終えた瞬間

タイタンの目が黄色く眩い光を放つた。

来る

「行くぜ、遅れんなよ！」

先頭を切ったのは大地だ。

「先手必勝！ロックプリズン！」

これは大地が神術の一つ“具現”をアレンジしたものだ。

タイタンの周りに格子状の岩を出現させて、檻にしている。

もともとグラヴィティマスターだったため、自分のエレメントが土や岩を使う魔法に適応している。そのため、自分との相性はばっちりだ。

ひとまずこれでタイタンの足止めはできる。だが抜け出されるのも時間の問題だ。

しかし、その一瞬の隙を使って、闘上は魔法を発動させる体勢を整える。

「影武者…ハ式！」

タイタンが檻を抜け出した瞬間、今度は八方位から現れた影がタイタンを襲う。

これも神術の一つ“幻覚”だ。

闘上もまた、女性にしては珍しい、ダークファイターだったので幻術の扱いはお手の物みたいた。

“幻覚”は“具現”と違い、実体はないから物理的ダメージはないが、相手の精神へのダメージや錯乱には向いている。そして、実体がない分、必要魔力は極めて少ない。

ガツッ！

へえー、結構考えたんだな…。

闘上のやつ、幻覚の中に本物を一つ混せてやがる。こりゃタイタンも手に余るな…。

だが……。ダメージは殆どに近い。タイタンは、動きこそ遅いが、体力と防御力だけは底なし。ちまちまダメージを与えても限がない。

だが、そろそろ水上の準備もできたみたいだ。

「ウォーターロック！！」

あいつのは、神術の“具現”と、自分の得意な水霊術の特性である吸収を組み合わせてできている。タイタンの足を地面に、手を天井に、それぞれ拘束してそこからさらに魔力を吸収する。しかもあの場合は吸収した魔力を直接技の使用分に回してもまだあまりが出るくらいの吸収量だ。これならいくらタイタンが馬鹿みたいに体力があつても放つておいたら力尽きるだろう。

しかし、こいつらはそれじや終わらせねえ…。

「沙鬼！龍斗！」

大地が叫ぶと二人とも分かつたと頷く。

そして、3人同時に両手を前に突き出すと

「「「トライアングルデストロイヤーーー！」」

と叫ぶ

その瞬間、3人の間に強烈な光が集まり、一点に集中する…。

その色は、次第に紫色へと変化していき…

一気にタイタン目掛けて発射された。

そして、その光の球がタイタンにぶつかつた瞬間、
タイタンは跡形もなく砕け散つて…消えた…。

これは、神術の最後の一つ“破壊”だ…。
だが…。

ここまで使いこなせるなんて…。

こいつら、やっぱり普通じやない。

戦うことに慣れているつていうレベルではない。戦うことに対する特化している。

そういうふた感じだ。

「お、お疲れ…。」

俺としたことがかなり動搖している。
「ああ、どうしたんだ？顔色悪いぞ」

大地が俺の顔を覗き込んで言う。

「それなんだけど…、俺は確かにお前らならタイタンぐらい倒せる
と思っていた。だが、お前らの実力は只者ではないって感じだった。
いつたい何者なんだ？おまえらは…。」

すると、驚いたような顔をして、水上が答える。

「そうか、天野にはまだ話してなかつたな…。俺たちのこと。いい
や、今説明する。俺たちは、もともと3人で活動していく…去年も
区間戦争に出たんだ。そこで俺たち3人は、チームを組んで行動し
た。そのときについた俺たちの通り名は、“迅雷の狼牙”これは、
俺たちが一瞬のうちに戦場を駆け巡り相手の冠球を碎く様からつけ
られたものだ。俺たち自身にも二つ名があつてな、沙鬼は“幻霧の”

“神鬼”。大地は“岩鉄の魔人”俺は“氷結の水霊”。しかしあまりにも早すぎる攻撃に、その姿を見た者は一人としていなかった。これが、俺たちが伝説とされていながら、普通に生活できている理由だ…。」

「これはさすがに驚いた…。

この町に来てすぐに耳にした強者の噂、“迅雷の狼牙”。それがこいつらだったなんて…。

「どうりで…強いわけだ。」

これなら納得がいく。予想よりはるかに早いが、もうここで修行などする必要はない。

「じゃあ、もうマスターできるんだから、帰るか?俺は3人に問い合わせた。

「そうだな、俺もう腹が減つてたまんねえ…。」

鳴るお腹をさすりながら、大地が言つた。

「そうだな、私もそろそろ限界だ。」

「俺も。」

と、他の二人も賛成のようだ。

「じゃあ、帰りはすぐだから。んじゃ、行くよ。エスケープ!!」一瞬、青い光が俺たちを包んで、視界が開けたらもう扉をくぐつていた。

「さ、到着。」

「早いな…。」

水上が尤もな感想を漏らすが、みんなそんなことはどうでもいい。早く飯が食いたい。それだけだ。

「じゃあ、すぐ千穂に飯作らせるから、俺の部屋で待つて。」「わかった。」

俺は言い残すと、リビングへ向かつた。

I ルビニア（破滅だー！（笑））（前書き）

はい、予告通りこの後からの更新は遅いですwww
ていうか、自分で言うのもなんだけど

闘上のキャラ最後壊れます！！

まあ、この小説まだキャラ設定明確じやないんで…。
決まってたら設定公開します！！

I 「ヒューマー」（破滅だーー（笑））

ガチャ。

「おーい、千穂。」

「あ、お兄ちゃん。早かつたね、もう修行は終わったの？」

「ああ、予想以上に上達が早かつたんだアイツら。もう初歩は完璧だ。」

「へえ。初歩って言つても魔法最高ランクの神術をもうマスターするなんて、すごいんだねあの人たち。」

「ああ。それよりさあ、アイツら今日泊まつてくつて言つてるから、飯はいつもより多めで頼む。」

少し驚いた様子だったがすぐに容認してくれたようだ

「了解。じゃあ少し離れてて。」

「あいよ」

俺は、千穂の座っているテーブルから離れた。
そして千穂は両手を前に突き出して、呪文を唱える。

「“具現タイムアクセレレーション”、モーメントクッキング！」
千穂が叫んだ瞬間、テーブルには、高級レストランにでも来たかの
ような錯覚をさせるような料理がずらつと並んだ。

これも神術の“具現”の中でも時を操作する能力だが、上級をアレ
ンジしたレベルなので、俺もやり方は知らない。

「ふうー。完成。」

「「」苦労さん。」

「全然。それより、修行してきたんでしょ？魔力回復作用のあるも
のを多く作つたから、少しはみんな、楽になると思うよ。」

「気遣いありがとな。じゃあ3人を…」

呼ぼうと思ったのだが…。

二階から、すごい音を立てて、三人とも降りてきた。

「お、おい何だこの匂い。」

大地がたまらず声を上げる。

「ああ、千穂が神術で作った料理。ほら、そのテーブルの上。」

俺はテーブルを指差して言った。

すると、大地は…。

「なんだ…これ…。今の時間でこれ作ったのか?」

感嘆の声を上げながら千穂に尋ねる。

「はい。でも、所詮は神術で作ったものですから…。」

それにして豪華な食事はさつきまで動きつぱなしだった3人にとつちゃ、かなり食欲をそそる。

「食つていいのか?」

さすが大地、もう我慢できねえみたいだ。

「千穂、お前ももう飯でいいだろ。」

「うん、少し早いけど問題なし。」

じゃあ…。

「「「「いただきま
す!」」」

…。

闘上と水上も限界だつたらしい。

まあ、俺もそろそろやばいな…。

「いただきます」

つと、これから食おうかな…。

こんだけあると迷つて仕方がないんだが、普通は…。

普通じゃない大地はもうすでにおかわり3回目という超人的な食いつぶりを發揮している。

そういうえば、今までの食事よりも少し豪華な気がする。

「千穂、お前こんなにバリエーションあつたっけ?」

どうでもいいが尋ねてみた。

「うん、でもいつも二人だから食べれないでしょ?」

そういうことか…。でも、俺がい訊きたいのはそうじやない。

「そうじやなくて、その魔法つて、自分が作れる料理じやないと作れないんだろ?」

そう、この魔法は確かに便利なのが料理が苦手だと意味がない。

それに

「それに、料理の味は自分の腕に比例するんだろ？ いつこんなの練習する時間があったんだ？」

だつてこの料理、見た目もそうだが、味も高級レストラン並みだ。ちなみに俺がやっても卵かけごはんでも手一杯だらう。

「ああ、そういうこと？ まあ、部活でもやってるし練習ならこくらでもできるから。」

「そつか」

納得、納得。

まあ、こいつが料理できるのは知つてたし、そう驚くほどのことじやないか。

そうだとしても、アイツらはそういうみたいだな。
闘上はかなり興味があるようだ。

「千穂ちゃん。よかつたら私に料理を教えてくれないかな！？」

疑問符じゃないし…。

まあ、女子なら普通の反応だ。

しかし、闘上もまだ中学生なんだし、そんな真剣にならなくとも大丈夫なんじゃ…。

まあ、かくして食事を終えた俺たちは、まだ時間が余つていてのことでの、俺の部屋で駄弁つっていた。

が、俺はふと思った。

こいつらに俺の境遇は話さなくていいのだろうか、と。
話したほうがいいだろ？

そうだ、こいつらの過去も聞いたんだし俺も…。

「な、なあお前ら。少し話があるんだがいいか？
恐る恐る尋ねる俺。

「「「ん？」」「」

3人とも息ぴつたりの返事。

「えつと…。おまえらの過去も聞いたから、そろそろ俺の境遇も話

「どうかと…。」

すると、結構興味があるのが、3人とも顔を近づける

近い

まいいか。

「じゃあ、改めて自己紹介から。」

おれは「ホン」と咳をして集中する。

しかし

「別にいい！」

さへせんせー打ひ木力

だから俺は……。

おひでにまつりた。

最後に取つておひざと温めていた。

俺の最後の砦であるこの最強の極秘情報を

三九
卷之二

さすがに信じてはもらえない

「「「「はああああああああ！」」」

「 「 「 まあ、 そりだつたんだ

いじもなかつた。

「えっと…、信じてくれるのか??」

۱۳۷۵

ありえねえ、俺も最初親から「おまえは神の息子だ」なんて科白をきいたときにはかなり動搖したんだが…。

こいつら、いとも簡単に受け入れやがった。

（……………何だこいつ。邪氣眼か？）注・地の心の声

(俺の耳はいいたい…………) 泣き止む心の想い

(Hruuii---!!) 洪々鬪上の心の声 (訴々破滅だ

合同授業（前書き）

久しぶりの投稿だ w
予言通り更新遅いっすね w
さすがに学校行きながらの部活しながらはキツイな

「まあ、信じてくれんのならこいや、明日もあるしもつねみ。動きっぱなしだったから、俺も眠い。

3人とも同じみたいだ

「あ、ああ。」「」「

いつも通りハモっていたが、どこか釈然としない様子だつた。でも、さすがに疲れていたからもう限界だ。

俺は朦朧とする意識の中で、部屋の電気を消し、みんなに「おやすみ」とだけ言って眠りについた。

翌朝、俺が起きたときにはみんなまだ眠っていた。

起こすのも悪いと思つて、少し表に出ようと下に降りると、なんだか外が騒がしい。

気になつて出たが、ただの小さな火事のようでもまだ問題なさそうだったからみんなを起こしにいった。

「おーい、みんなもう朝だぞ。」

すると、水上がピクッと反応してすぐには体を起こした。

「ああ、天野か、おはよっ」

「おはよっ」

どうやら水上は朝に強いらしい。

続いて鬪上も起きたが、こけらはまだ完全覚醒とはいえないようで、しばらく床をこすつていた。

なんか…若干可愛い。

が、それも数十秒で、まだ寝ている大地を見つけると、

「起きろ、対馬あああー！」

と、奇声を上げながら、大地の腹に踵落とし…。

可哀想に…。

「うう…。」

大地も苦しそうにうめきながら起き上がる。

状態はともあれ、全員揃ったので、下で千穂が作った朝ごはんを食べて登校した。

キーンコーンカーンコーン

始業の合図だ。

水上の話によれば、神術の授業は一番最初らしい。

そんなことを考えていると、すぐに先生が来た。

「みんな、今日の神術の授業は、5組との合同授業とする。」

（えー、5組と合同？）

（めんどくせー）

クラスからは野次も飛んだが、先生は構わず続ける。しかしその一句で、クラスは凍りつくことになる。

「…今日は、抜き打ちの実習だ。予告しておいたから、もちろん初歩の段階はある程度大丈夫だよな？」

含み笑いを浮かべながら、先生がいやらしく言った。

……。

みんな言うこともないらしい。

だが、そこで大地が、

「いいじやんか、やつてないやつが悪いんだ、素直に負けるんだな

（笑）

最後こいつ鼻で笑つた…。

（なんで大地が自信たっぷりなんだ）

（普通こっち側の人間だろ）

（しかも鼻で笑われた…。）

大地はいつも不真面目らしく、そんな大地の自信たっぷりの一言にみんな火がついたようだ。

(上等だ、大地なんざあ俺が叩き潰してやる)

(私たちだつて)

「ほう、やる気満々だな。よし、全員校庭に集合、そろつたらトーナメント表に従い開戦だ！」

先生の一言で、みんなが一斉に席を立つ。

「おい、天野。行こうぜ」

「ああ。」

大地に呼ばれて、俺も校庭に急いだ。

すぐに校庭についたが、そこはいつもの校庭じゃなかつた…。グラウンドはきれいに整備され、白線でコートが区切られている。その中でもひときわ目立つのが、中心にある大スクリーン。いつも荒れっぱなしのこの校庭に、4方すべてに見えるようになっているスクリーンがある。

そこには、じう映し出されている。

“開戦5分前、生徒は直ちに自分のコートで戦闘配置につけ。”

「んじや、まあ…行くか。」

俺が言うと、

「そうだな、沙鬼も龍斗も健闘を祈る。」

大地はいつにもましてまじめな聲音で言つ。

そのまま何も言わずに、俺たちは背を向けて歩き始めた。

“第一試合開始！！”

スクリーンからアナウンスがあつた。

「めんどくせーけど…。しうがないか。」

俺がもたもたしていると、相手の5組の生徒が

「おまえら1組の分際で、俺様を待たせてんじやねー…！」
と、かなりきつい口調で言つてきた。

なるほど、そういうや5組つてエリートなんだつけ。

「そうか、すまないな。だが、本氣でやらせてもらひつ…。」

「……」

その瞬間、若干小太りの相手の体が、一瞬にして俺の前に来ていた。

「残念だが、これで終わりだ……。」

確かに、エリートなだけある。

だが。

「天神流奥義……デコピン！」

飛んできた光弾を俺は指先で跳ね返す。

その光弾は、飛んできた時の倍のスピードで、相手の頬をかすめて飛んで行つた。

「……」

完全に青くなつてゐる。

まあ、当然か。

俺、神だから……。

じゃあ、小太りには悪いが、重力の本当の恐ろしさを思い知らせてやるか。

「天神流創造術……グラビティバインド……！」

俺は、神術最上級の“創造”的力を放つ。

この“創造”は“具現”と似通う点はあるが、別物である。

“具現”は、知つているものを、その場に作り出す。

その際の材料となるのは、自分の魔力。

“創造”は、自分がイメージした物体、幻覚、その効力などを現実に反映することができる。

「なつ？」

小太りの体は、完全にその場にくぎ付けになる。

「……何をした……。」

小太りは、自分が置かれている状況に気付いてないらしい。

「下を見てみる」

俺がそう言うと、小太りは素直に下を向いた。

その瞬間、小太りの顔が思いつきり引き攣つた。

「な、何なんだこれは？」

かろうじで立つていてる小太りの足元に、淡い紫色の蜘蛛の巣状の網が張り巡らされている。

「これが、俺の魔法だ。」

これは、指定した場所に網を張り、その一点の重力だけを自由に操る魔法。

普通は足止め程度なのだが、場合によつては、対象を潰すことさえできる。

「ギブアップしてくれ。そうしないと、骨の一つや二つ、軽く逝くぞ…。」

わざと声のトーンを下げて抑圧する。

もう完全に戦意のない小太りは

「ま、参りました！！」

と、あっさり負けを肯定した。

「さ、次はどうが相手だ？」

俺が周りをギロツと睨むと、そこいらにいた生徒が5歩ぐらい後ずさりする。

「戦いたくなけりや、今すぐ降参してくれ…。」

めんどくさいから、こうするしかない。

戦うなんてことは、必要最低限で押さえたいものだ…。

なにしろ、めんどくさいから…。

と、ほんの十秒で、俺のいるEブロックのトーナメント表は、俺の優勝という表記に変わった。

どうやら全員降参してくれたらしく。

「さてと、アイツらどうなつたかな？」

俺は、大地たちを確認すべく、他のブロックのコートに向かった。すると、他の3人もすでに勝負がついて、見事に優勝だった。

しかし、この試合は6ブロックあつた。

他のブロックの勝者を確認しようといつ話になり、俺たちはE・Fブロックのコートに向かつた。

途中で大地が

「どいつもこいつも雑魚ばつかで、全然戦い足んねーぜ。」

などと、余裕をこいていたがそんなことはどうでもいい。

今気になるのは、E、Fの優勝者。

そんなことを思つてゐると、水上が

「まあ、Eブロックの優勝はあの人以外考えられねーよな?」

と、闘上の言つていた。

闘上のほうも無言で頷く。

俺は気になつて訊いてみる。

「なあ、あの人つてのは誰のことだ?」

すると、大地が割つて入つてきて

「前に話しただろ? B T B シュガーネ総長、佐藤 風介さとう ふうすけだ」

ああ、そういうえばそんなこと言つてたつけ。

「でも、その組織自体は馬鹿げた目的のためだつたんじや……。」

たしか、美少女を追跡するつて……てかストーカーだな。

「いや、そつちは上つ面だけのもので、本来はこの学校の自警団つてところかな。」

「マジかよ! ?俺てつきりただの変態集団だと……。」

まさかそんな組織だつたとは……。

「言つただろ、上つ面は変態集団だ。メンバーに入るか、こちらの勧誘を受けるかしないと本当の目的はわからない。」

「そうか……。それで組織の機密は守られるつてわけか……。」

「納得してくれたか。」

「まあな。」

と言つても、自警団があつたところで学校内の騒ぎなんかは教員がとめればいい話。

実際自警団が必要なのかさえ分からぬから、入るつとは正直思わない。

勧誘されたら別だが……。

そこで闘上が

「騙されるな、天野。」

と、小さな声で囁いてきた。

「何が？」

俺が訊き返すと鬪上は

「やつの言つてることは、正しいが正しくない。……わけのわからん言い回しをしやがる……。

「で、結局何が言いたいんだ？」

「よつするに……。確かに對馬が言つてることは正しい、しかしそ前も氣付いているだろう。この学校で自警団なんて言つてもやることなんて何もない……。」

立ち止まって話出した鬪上に少し戸惑つたが、そういうことか。

「なら、あそこには入るなってことか？」

「そうかも知れないな……。

「いや、それは違う」

つて、はあ？

「なんでだ？ 今の言い方だと絶対に勧誘を断れつて言つてるようしか聞こえないんだが……。」

「確かに変態なのは認める……。だが、あそこはとても暖かい。」

急に顔を赤らめながら鬪上が呟いた。

「じゃあ、入つていいいんだな？」

つて、俺入る気なかつたのに……。

「ああ！」

なぜか異様にテンションが上がつた鬪上は、元気よくさう言つて、大地と水上のほうへ走つて行つた。

まあ、せつかくだから入つてみるか、BTBシユガー……。

そんなこんなで俺たちがEブロックについたときには、もう試合は終わつていた。

すると、さつき大地が言つていた佐藤らしき人が、コートから出できた。

そして大地を見つけると、

「よう、大地じゃねーか。」

「あ、おつす先輩。」

?

先輩??

「なあ、同じ学年だろ?」の一人。

俺が訊くと水上が

「ああ、団長は留年だから、一個年上なんだ。」

へえ…。

「つて、留年!？」

「ああ。」

「でも、5組つてことはヒリートなんだろ? なんで留年なんて…。それはさすがにおかしい。」

「そうだよ、団長は頭もいいし、戦闘だつて完璧だ。」

「じゃあ、なんで?」

「それは…。あの人は、“変態”で“問題児”だから。」

「酷え言いようだな…。」

先輩なんじや…。

「!!」

声が聞こえていたのか、水上のダブルパンチを喰らった団長(?)は、少し頑垂れてからこちらに向きなおした。

「ああ、水上か。」

「す、すみません先輩。少し度が過ぎました…。」

素直に謝る水上に、

「いや、まあいいんだ。お前の言つてる」と全部本当だつたし…。最後は力なく言う団長(仮)。

しかし俺に気付くと、

「と、君が天野か?」

「ええ、はいそうですけど…。」

すると団長(笑)は、満面の営業スマイルで

「よかつたら、うちの自警団に入ら…。」

「嫌です。」

しかし俺は遊んでみたくなつて、つい即答してしまつた。

「ぐつ！」

かなりの精神的ダメージを受けたのか、団長（爆笑）はその場で固まつてしまつた。

さすがに可哀想なので俺は

「いやいや、冗談ですよ。入ります自警団。

するとさつきまでのが噓のように、団長は、目を輝かせて食いついてきた。

「ホントか！？」

「ああ」

「じゃあ、放課後部室へ来い。んじゃまたね。」

そして団長（アホ？）は、上機嫌で去つて行つたのであつた。

「ここのFか…。」

俺たちはすぐ隣のFプロックのコートに來ていた。
そこでももう戦闘は終わつていて、勝者“千丈斬弥”と表示されて
いた。

俺たちの中には顔見知りがいなかつたのだが、雰囲気は悪くなさそ
うだつた。

「あいつも、そこそこ強いのか？」

俺は水上に訊いてみた。

「ああ、通り名“瞬技の一太刀”。」

瞬技の一太刀…。これは聞いたことないが、通り名があるあたり強
いのは明確だ。

しかし、深く追求しても仕方がないからそこでやめた。

「通り名があるんじやあ、強いんだな。」

「そうだな、5組じや団長と肩を並べるくらいの実力の持ち主だ。」

「

そこで鬪上が付け加える。
「顔立ちや性格もいいため、女子からの人気も高い…。」

無駄な情報ありがとう…。

「んでもまあ、あの顔なら納得かな。」

確かに千丈の顔立ちは、どこかのアイドルグループにいてもおかしくはないような感じだ。

それに、どことなく声をかけやすい雰囲気がある。

モテて当然だろう。

「それにしても…。俺たちブロックでは優勝したわけだが、いったい何があるんだろうな。」

俺が何気なく呟くと水上が

「まあ、何かはあるだろう。でも大抵こういう感じの急きょ開かれたり普チ大会みたいなやつは、突然舞い込んだ依頼などを生徒に押し付けるためのものだ。」

「はあ？」

俺は言つている意味が分からぬ。

続けて水上

「まあ要するにだ、この学校は戦闘に自信のあるものを養成する場所。つまり、外部や国からの戦闘系の依頼がよく届くんだ。普通は先生たちが選出したベストメンバーで依頼をこなすのだが、そこまで難易度の高くない依頼の場合は、中等部の生徒の中で選ばれるときもある。」

「つまり…、めんどくさいから誰かやって。って事だよな?」

俺が簡潔にくくると

「まあそんなどこかな。」

水上も肯定した。しかしそのすぐ後、水上の顔が引き攣つた。

「どうしたんだ?」

と俺が尋ねると。

「天野…。後ろ……。」

と、俺の背後を指差して言つた。

俺がスッと振り向くと、そこにほほの学校の学園長“龍刃正宗”の姿が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3025y/>

神で勇者で莫迦な俺

2011年11月24日20時45分発行